

あれから10年、 福島の今

2021年3月11日で東日本大震災から10年を迎えます。NPO法人マインツ友の会は2011年の震災後直ぐに設立された支援団体です。2016年には5周年イベントとしてマインツ市内のミニシアターで”フタバを遠く離れて”の映画上映会を開催させて頂きました。NPO法人アースウォーカーズとは2016年に福島ドイツ高校生プロジェクトを通して知り合いました。この5年間で沢山の高校生がドイツの再生可能エネルギーを学ぶためにこのプロジェクトに参加されました。今回は10周年イベントとしてNPO法人アースウォーカーズと共同主催で福島から3名の講演者にお話をして頂きます。福島の現地から生の声をお届けしますので興味のある方は是非ご参加ください。

なお、イベント参加は無料ですが、アースウォーカーズの今後の活動へのサポートを寄付という形でご協力いただくと大変嬉しいです。

日時: 3月21日 19:00-22:00
(ドイツ時間 11:00-14:00)

会場: オンラインにてZoomライブ配信

申込先: <https://earthwalkers.jp/311Event/MainzEvent.html>
(ご興味のある方は 3月12日から3月20日までに上記のリンクからお申し込み下さい。後日Zoomから視聴招待状をメールにてお送りします)

主催: NPO法人 Earth Walkers (日本)、
NPO法人マインツ友の会(ドイツ)

プログラム

19:00 / 11:00 (ドイツ時間)
開会挨拶、マインツ友の会代表高山敬一郎氏

19:05 / 11:05 (ドイツ時間)
Earth Walkers代表小玉直也氏挨拶

19:10 / 11:10 (ドイツ時間)
プログラム説明

19:15 / 11:15 (ドイツ時間)
井戸川克隆:「双葉町民の避難と避難後の生活」

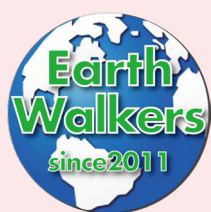
19:25 / 11:25 (ドイツ時間)
渡部めぐ:「あれから10年、そしてこれからの私」

19:35 / 11:35 (ドイツ時間)
松野みき子:「親子で体験した福島の震災と今」

19:45 / 11:45 (ドイツ時間)
各ルームでの視聴の仕方説明&休憩

19:50 / 11:50 (ドイツ時間)
講演および質疑応答

21:50 / 13:50 (ドイツ時間)
閉会挨拶



井戸川克隆 (イドガワ カツタカ)

元双葉町長、現東電原発事故研究所所長

昭和21年福島県双葉町生まれ。福島県立小高工業高校機械科卒業。

昭和53年3月有限会社丸井設備創業。株式会社丸井代表取締役社長就任。

平成17年12月双葉町町長就任7年3ヶ月務める。

平成25年2月双葉町長辞職。その後も原発事故に対応などに奮闘し、現在東電原発事故研究所所長。

2011年3月11日に発生した、東京電力株式会社福島第一原子力発電所の事故発生以来、内閣府、経済産業省原子力安全・保安院、原子力安全委員会、東京電力、福島県などが発表してきた、ウソやねつ造が福島県民をはじめ、国民を騙してきたことが、1937年から始まった陸海軍のウソの戦況発表と重なっている。

渡部めぐ

福島県立安積高校3年生

2001年福島県郡山市生まれ
2011年小学校3年の時に東日本大震災を体験。2017年福島県立安積高校入学。

同年7月イタリアに40日間の福島の子どものための保養企画に参加
その後も2012年イタリア保養に40日間、2013年沖縄に7週間、2014年沖縄に3週間など保養プログラムに参加

2014年私立郡山ザベリオ中学校入学。2015年アースウォーカーズのオーストラリアプロジェクトに参加。日本語のスピーチしか準備していなかったが、最終日英語のスピーチにチャレンジし多くの方々の喝采をうける。帰国後、悩んでいた剣道に真剣に取り組み、直後の大会で福島県で優勝し、全国大会へ出場。2017年福島県立安積高校入学。2017年8月アースウォーカーズのドイツプロジェクトに参加。夏休み明けから日本の高校を休学し、ドイツ南部のアルゴイにある高校に1年間留学。2018年9月から日本の高校に復学し2021年3月卒業。ドイツの大学入学へ向け本年ドイツへ渡航予定。

松野みき子

和みサロン“真こころ”スタッフ

1972年 福島県相馬市生まれ
1991年 福島県立相馬女子高等学校卒業

卒業後福島県内の企業に就職。結婚を機に退職。1男1女の母親。

2011年 東日本大震災で被災福島県相馬市の沿岸部の自宅は津波の被害を受け失う。

2011年3月11日わが子と車で逃げる最中、すぐ後ろまで津波が押し寄せ、娘が「津波が来た!早く逃げて!」と叫ぶ中、ハンドルを握り避難して一命をとりとめる。自宅も流され近所の方も命を落とし、今も遺体が見つからない人もいる。原発事故を受け、子どもを北海道に避難させ見送る際「私たちは被曝して命を落としたら最後の別れとなるかもしれない」と涙が止まらなかった。震災後、仮設住宅での集会所のサロン活動で被災者と全国の支援者の橋渡しを続けてきた。現在も支援活動を続けている。